

小特集「南アジアイスラーム文献の出版・伝播 1」

序文

東長 靖*

KIASでは、イスラーム地域研究の枠組のもと、中東のみならず、イスラーム世界全体に目を配ろうとしているが、なかでも南アジアのイスラームに関する研究に力を入れている。南アジアは、全世界のムスリム人口の約3分の1を擁する重要な地域でありながら、イスラーム研究・イスラーム世界研究において十分な関心を払われてはこなかった。しかしこの地域は、イスラーム世界の一大中心地であり、歴史的にはペルシア語とアラビア語、後にはウルドゥー語やベンガル語などを媒体として、情報発信の中心地のひとつでもあり続けている。

KIASはこれまで、アラビア語およびペルシア語・トルコ語資料の収集に力を入れてきているが、南アジア・イスラームを研究するにあたっては、ウルドゥー語が不可欠の言語であり、その資料を集積したいとかねて願ってきた。

幸いにも、平成24年度(2012年度)京都大学全学経費(大型コレクションの整備)において、「モイヌッディーン・アキール博士(Dr. Moinuddin Aqeel)所蔵ウルドゥー語文献コレクション」の購入が措置され、アジア・アフリカ地域研究研究科が受け入れることとなった。その概要については山根聡教授(大阪大学)による次の解説をご覧いただきたいが、単一の機関に所蔵されるウルドゥー語コレクションとしては、大英図書館に次いで世界第2の規模を誇るコレクション、「アキール文庫」が形成された。

他方、NIHU(人間文化研究機構)イスラーム地域研究プロジェクトでは、同じNIHUの現代インド研究プロジェクトと連携して、地域間連携研究の推進事業「南アジアとイスラーム」というプログラムを2012年度に立ち上げたが、京都大学はこの両プロジェクトの拠点を共にもっていることから、この連携研究を中心になって担うこととなった。

また、2012年度から科学研究費プロジェクト「南アジア諸語イスラーム文献の出版・伝播に関する総合的研究」(研究代表者:東長靖、研究分担者:小杉泰・田辺明生・山根聡・松村耕光・井上あえか・今松泰、連携研究者:岡本正明・池野旬)が開始された。本研究は、近現代南アジア・イスラームがもつ固有性/普遍性を実証的に見定めるために、南アジア・イスラームの顕著な特徴である、宗教概念と結びついた印刷文化に焦点を当て、印刷文献がどのように選定されたのか、それらがどこでどのようにして印刷されたのか、そしてそれらがいかなる経路で伝播したのか、の三点、つまり「近現代南アジア・イスラームが創出した出版文化の総体」の研究および情報蓄積を行うものである。京都大学が所蔵することとなった「アキール文庫」は格好の資料であり、これを有効に活用することで研究を推進しつつある。

現在この科研では、上記連携研究ともタイアップしつつ、「アキール文庫」を元に、南アジア・イスラーム文献の出版・伝播を研究するための基礎となるデータベースを構築中である。同時に、この貴重なコレクションを実際に利用した、分野別の研究を進めることにしており、本小特集はその第1回に数えられる。

この小特集は、上記科研において2012年12月25日および2013年11月29日に開催された研究

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 教授

会における発表の一部に基づき、それに加筆修正を加えた論考3本を収めたものである。

山根聡大阪大学教授による「京都大学アキール文庫について」は、アキール博士の経歴・業績を紹介するとともに、このコレクションの概要と意義を明らかにする。次いで、北田信大阪大学准教授による「ウルドゥー文学前史：南インドのウルドゥー語文献」は、今はインド領になっているデカン地方で書かれたダカニー・ウルドゥー語文献を取り上げ、その重要性にもかかわらず、等閑視されてきたこの文献群を研究することの意義を、実例をもって説き明かす。最後に、篠置理子氏(大阪大学大学院博士後期課程)は「ムイースッディーン・アキール博士文庫 アブル・アアラー・マウドゥーディー関連書籍に関して」と題して、アキール文庫に含まれるマウドゥーディー関連書籍の全容を明らかにするとともに、それをどのように研究に活かすかの可能性を説いている。

「アキール文庫」は南アジア研究、イスラーム研究のための宝庫であり、この小特集は、この宝庫に最初に分け入った研究者たちの採掘成果である。今後も、この宝庫を最大限に活用して、南アジア・イスラーム研究の珠玉を探り当てていきたいと考えている。